

## 『滑稽絵姿合』 翻刻と解題

白戸満喜子

本稿では国立国会図書館所蔵の『滑稽絵姿合』（以下、本書）の翻刻と解題を試みた。『国書総目録』の記事では同館と漆山又四郎（天童）の所蔵となっている。しかし、漆山又四郎が所蔵していた版本は現在所在の確認がとれないため、閲覧に供されているのは本書のみといえる。

作者の柳下亭種員（りゆうかていたねかず）は柳亭種彦門下の合巻作者とされるが、実像は明らかではない。絵師の歌川国芳は武者絵で人気を博した浮世絵師で、初代歌川豊国の門弟。国貞・広重と並ぶ江戸末期の歌川派三大閥の礎であり、門下には明治期の浮世絵界を支えた河鍋曉斎や月岡芳年がいる。

本書については中野三敏氏が「見立絵本の系譜―「百化鳥」の余波―」（『語文研究』第34号（昭和47年 九州大学国語国文学会））において「絵姿合」として書誌情報を紹介している。中野氏の論中には36タイトルの見立絵本が収録されているが、本書はその36番目であり、最後の見立絵本といえる。見立にはさまざまの意味があるが、ここでは「他のものになぞらえる」という意味であり、この意味での「見立」は近世文化において共通する表現技法であった。和歌から脈々と引き継がれた見立という文化はやがて、俳諧・歌舞伎・落語・浮世絵と広がりを見せるが、時代と印刷技術の変化とともに、このような絵本は作られなくなっていく。失われた江戸の滑稽をここに紹介する。

### 《凡例》

翻刻は底本の復元につとめ、次のような方針によった。

- 1 漢字は現行の字体としたが、当時の慣用と認められる異体字は使用した。
- 2 仮名遣い・清濁点・ルビ等は底本のままとした。
- 3 底本の改行は／とした。

《書誌事項》

当館請求記号…二〇八—八

書名…滑稽絵姿合

形態…一七・六×一二・一cm 全二十二丁

帝国図書館後補の厚表紙

原表紙…多色摺絵表紙

題名 右上方「こつけい／ゑすがた／あはせ／全部／一冊／天保甲辰／孟陬發行」

作者名 左上方「柳下亭種員戯作」「朝櫻楼国芳狂画」

版元名 中央下方「耕書堂梓」

丁付…なし

刊記…最終丁の翻刻参照

蔵書印…表紙および三丁裏に「帝国図書館蔵」印



朝櫻樓國芳狂画

柳下亭種員戲作

あつせ  
 孟 天保 金部  
 廠 甲辰 冊部  
 義 辰



耕書堂

柳下亭種員戲作

滑稽

繪姿

合 全部  
一卷

歌川国芳狂画

葛重

上梓



繪姿合 自序

故人京傳翁の画兄弟は寛政六年に新版  
 より多耕書堂の大當りも卒余年の以  
 あらう世の今にいとる守他の作意も羨す  
 士殿目のあつあつとあつと鏡小替の延が  
 われが遺るを拾へと先一力で酒房ふひり  
 思は信田の狐その葛の葉も(看版書)を  
 立り為る藝盡し。チヨツクラ一寸の程成(軍書讀  
 み張扇あそを斯りて(閻魔王)様ととを

繪姿合 自序

故人京傳翁の画兄弟は。寛政六年の新版  
 にて。耕書堂の大當りも。五十余年のいにしへ  
 ながら。世の人今にもてはやす。他の作意も羨ましく。  
 七段目のおかるにあらねど。鏡に替る延がみに。  
 それが遺るを拾はんと。先一力で洒落にいふ。むかし  
 思へば信田の狐。その「葛の葉」には「看版書」を見  
 立に為なる藝盡し。チヨツクラ一寸これを「軍書讀  
 に。張扇なんぞを斯もたせ。「閻魔王」様とはどで

ごんす。コイツハゑらい大仕掛の。「蜃氣楼」には「焼蛤」。

花に遊ば、「奥道者」が。吉野辺の落がきには。櫻

が本の「備後三郎」。あかりを照す鉤燈爐の。月

形に因る「落雁」に。取合せたる「笠招牌」を。つなぎまし

たる命は。同。大夫様でも歩卒でも。御恩に重いと軽いの

ない。「挑灯鐘」は。「空樽買」と迄はこぎつけ。扱「船工」は仁

田「四郎」。し、身中の虫といふは。是由良之助がことばなり。足を

戴く蛸がかなに。かたちの似たる「蟾蟠」と。對にするのは

野中の「地藏尊」。九太夫は松浦小夜姫をやられ。「初平仙人」

せんき。コイツハゑらい大仕掛の「蜃氣楼」に「焼蛤」  
花よ遊ば「奥道者」が吉野辺の落がきには櫻  
が本の「備後三郎」あかりを照す鉤燈爐の月  
形に因る「落雁」に取合せたる「笠招牌」を  
つなぎまし  
たる命は。同。大夫様でも歩卒でも御恩に重いと軽いの  
ない。「挑灯鐘」は。「空樽買」と迄はこぎつけ。扱「船工」は仁  
田「四郎」。し、身中の虫といふは。是由良之助がことばなり。足を  
戴く蛸がかなに。かたちの似たる「蟾蟠」と。對にするのは  
野中の「地藏尊」。九太夫は松浦小夜姫をやられ。「初平仙人」



が石は羊と化。そのひつじには由縁の有。(紙屑拾)を兄弟  
 とやうく思ひ月の入る山科あそび是も又都は近江市京  
 の(鬼童丸)の見えく少(青海苔世貞)これゆ打太(神樂  
 也(旅神樂)とあそびまて丁度十番へええらあ稿成てそ  
 名(得え)られぬ新作者(譬喻)寺田平右衛門足輕風情と  
 法(え)捨(き)りて小(説)家(の)連判(小)御加(あ)されてて(さ)る(ま)る  
 偏(み)ね(び)たて(ま)る(と)段(か)切(小)出(る)三人(侍)等(く)た(ん)く  
 あ(や)ま(り)入(り)お(し)て(序)ス。

天保十五甲 辰孟陬發行 柳下亭種員識



が石は羊と化。そのひつじには由縁の有。(紙屑拾)を兄弟  
 と。やうく思ひ月の入る。山科ならで是も又。都に近き市原  
 の。(鬼童丸)の見くらべには。青海苔貫うた札に打。太々神樂  
 や(旅神樂)と。これまで丁度十番はえんやらやつと稿成ても。  
 名(さ)へ得(え)しれぬ新作者(は)。譬(ま)喩(ば)寺(た)岡(が)平(へい)右(え)衛(ゑ)門(もん)。足(あ)軽(か)風(か)情(じやう)と  
 御(お)見(み)捨(す)な(う)。ゆ(く)く(小)説(さ)家(が)の)連(れん)判(はん)に。御(お)加(か)へな(さ)れ(て)く(だ)さ(る)や(う)。  
 偏(ひとへ)に(ね)が(ひ)た(て)ま(つ)つ(と)。段(だん)切(きり)に(出)る(で)三(さん)人(にん)侍(ざむらい)に(等)し(く)。だ(ん)く  
 あ(や)ま(り)入(り)ま(し)て(序)ス。

天保十五甲辰孟陬發行 柳下亭種員識

一番

兄あに 葛くわの葉は

乱菊らんぎくや

狐きつねにも

せよ

その

すがた

晋子

一番

兄あに 葛くわの葉は

乱菊らんぎくや

狐きつねにも

せよ

その

すがた

晋子



口くちでものかいて手で  
機はたおりやる  
五両ごりょうでおびヨかつて  
三両さんりょうでくけるがきいて  
あきれる

口くちでものかいて手で  
機はたおりやる  
五両ごりょうでおびヨかつて  
三両さんりょうでくけるがきいて  
あきれる





弟 看版書

談林調

うす

こぼり

張るや

障子

の

かみや

川

内は何をあげるか  
 大さうにはねる  
 おとがするはへ  
 にほひをかいたら  
 しきりに  
 くひたく  
 なつ  
 夕

一番兄 葛の葉

夫を保名といひ。妻をくずの葉と呼は。さながら

青物屋の棚ざらしに似たり。安部野にちかき

機織虫。あきもあかれもせぬ中ながら。頼頭の

庄司に野干と見られて。心はづかしの茂林に

はあらで。信田の森の古栖へ帰るは。是天縁の盡る

所。今更誰を欺うらみくずのは。

一番弟 招牌書  
看板に偽がなければ。内はみるに不及とは。画かんばん

一番兄 葛乃葉

夫を保名といひ妻をくずの葉と呼はさながら

青物屋の棚ざらしに似たり。安部野よりけ

機織虫あきもあかれもせぬ中ながら。頼頭の

庄司に野干と見られて心はづかし茂林に

あらで。信田の森の古栖へ帰るは。是天縁の盡る

所。今更誰を欺うらみくずのは。

一番弟 招牌書

看板に偽がなければ。内はみるに不及とは。画かんばん

看版かんばんに偽いつはりがなければ。内うちはみるに不及およばぬとは。画えかんばん

を見落おとしたるを今年不見不見不死不死所所とち。  
 假名招牌かみなかんばんの讀よみりひる。牙牌くはな口上中途くちやうちゅうと  
 止とどまる。輕業かろくの經つみこり。客人きやくじんを踏倒ふみおして居おる。足力あしぢから  
 の牌子くわんたいかんぐつを賣うて為い舞まふ。初午はつごまの太鼓屋たごや身み  
 ぢ。爰こゝ招板書かんばんがき分ぶん書躰あよみを見みる。大師道風おおいちどうふうを  
 筆勢ひつせいをもああららむ。嵯峨瀧本さやがたきの今様いまさまもああららむ。  
 ああ雪ゆきの白しろの餅もちの黄きあるある。ちち墨すみくくととままららむ。  
 ひひる。並木なみきの鐘木屋かねくみやと鼻祖はなはらととままららむ。太たく書かねば目め  
 みたみたぬぬととらら。如何いか様さまももりりくく尤ゆ成なり思おもひ付つあり。

を見た落おとしはなしにして。ことしやみせん不見なん所不死とは。  
 ひら假名招牌かみなかんばんの讀よみちがひなり。招牌かんばんたる口上中途くちやうちゅうに  
 止とどまる。輕業かろくの綱つなわたり。客人きやくじんを踏倒ふみおして居おる。足力あしぢから  
 の牌子かんばんかんぐつを賣うて為い舞まふ。初午はつごまの太鼓屋たごや身み  
 ぢ。爰こゝ招板書かんばんがき分ぶん書躰あよみを見みる。大師道風おおいちどうふうを  
 筆勢ひつせいをもしたはず。嵯峨瀧本さやがたきの今様いまさまにもあらず。  
 あわ雪ゆきの白しろ。あは餅もちの黄きなるまで。墨すみくくととままららむとした、  
 むるは。並木なみきの鐘木屋かねくみやを以もつ鼻祖はなはらとするか。太たく書かねば目め  
 見た、ぬとは。如何いか様さましゆもく尤ゆ成なり思おもひ付つなり。

二番 兄焼蛤蚌  
やきはまがひ

桑名 には  
くはな

網干 宮の  
あみほし

二番

兄焼蛤蚌  
やきはまがひ

桑名  
くはな

網干  
あみほし

宮の  
みやの

あま  
あま

哉



作者めもよくあやうが  
 ろのとまをさぢりくも  
 おなじ蛤を  
うのた

あ、あれハ  
 くらゐのいまふくと  
 生もたたりまされてあうが  
 とりのささまはどこのうまれか

作者めもよくしやうが  
 ないとみえてどちらへも  
 おなじ蛤を  
 かいタ

しかしおれは  
 くはなのはまぐりと  
 生国もたしかにされてゐるが  
 とりのささまはどこのうまれか

弟 蜃氣楼 あんきろう

天明年中  
百鬼夜行



何れが生国はじんにも  
たしかにしれやせんが  
なべの中へ何もいれずに  
ふかされたら  
唐土蛤  
ともいひ  
ませう

おれがかう  
やつてゐる所を  
田舎者が見て  
蛤が唐土の  
ゆめをみて居ると  
いつたも大わらひだ  
りけりも大まらひだ

弟 蜃氣楼 あんきろう

天明年中 / 百鬼夜行

はま / くりの  
柱 やよせて

たてつ

らん

工手間を / みるも

あ、

しん氣楼 / 東作

何わしが生国はじんにも  
たしかにはしれやせんが  
なべの中へ何もいれずに  
ふかされたら  
唐土蛤  
ともいひ  
ませう

おれがかう  
やつてゐる所を  
田舎者が見て  
蛤が唐土の  
ゆめをみて居ると  
いつたも大わらひだ



二番 兄 焼蛤蚌

はまくり十五夜に時恵を見て。蜷は初午の絡

のごとく愚智をいひ。蚌 雛棚へあがるを見て。猿蚌羨

むこと精霊會の神道者に似たり。雀は海中へ入て蛤と

なるとも。鶺鴒とは兎角中が悪し。寧眼葉の人物となつ

て。終りを踏臺の穴に取とも。梳油の器となつて。鼠の

為にひかる、事なかれ。

二番 弟 蜃氣楼

天竺にては大日經に乾闥婆城と是を説。唐土晋の

二番 兄 焼蛤蚌

なほかり十五夜おほひ時恵ときめぐを見てみ蜷なまは初午はつうまの絡たぬき

のごとく愚智ぐちをいひい蚌はま雛棚ひなだなへあがるあがるを見てみ猿蚌羨さるはうらや

む事精霊會せいりやうかいの神道者かみちのしやに似にたりたり。雀すずめは海中かいちゆうへ入いてい蛤はまと

あるとも鶺鴒しじやうとは兎角中うさぎのつらが悪あしし。寧眼葉ねいがんはの人物にんぶつとなつ

て終はつりを踏臺ふみだいの穴あなに取ととも。梳油すきあぶらの器うつはとなつてな鼠ねずみ乃

為なにひかるひかる、事ことなかれ。

二番 弟 辰虫 氣楼

天竺てんぢくにては大日經たひにちのきやうに乾闥婆城けんたつばじやうと是これを説とま唐土晋たうししんの



伏琛が三齋略記に海市と見え扱日本より始  
 まりし人皇何十何代と煮てかある説あり  
 今も彌生のあろ否小越路の法入現つ所と南谿  
 が東遊記に載たり空中かせり出ま造化の手細  
 工大仕掛木戸銭のうすのませ物の長谷川も又及  
 盛くうまげとも正まき物あり糸を霞に隠れ雲  
 又消看官あまのふま孤のむあまあん氣樓とを  
 号は何ふあても昔より云傳たる説あり中々  
 まんきの物ゆるあらし。

伏琛が。三齋略記に海市と見え。扱日本に始  
 まりしは。人皇何十何代と。煮てかためたる説はなし。  
 今も彌生のころ否に。越路の海へ現はるゝと。南谿  
 が東遊記に載たり。空中にせり出す。造化の手細  
 工大仕掛。木戸銭いらすのみせ物は。長谷川も又及  
 べからず。されども正しき物ならねば。霞に隠れ雲  
 に消。看官しきりに氣をもむゆえ。しん氣樓とも  
 号か。何に為ても昔より。云傳たる説なれば。中々  
 しんきの物にはあらし。

三番

兄 辻講釋

川柳点

講釋師

みて来た

やうに

虚をつき

三番

兄辻講釋

川柳点

講釋師

兄も来た

やうに

虚をつき



えんまありやこそおまへと  
 かうさしむかひであるから  
 まい日わたしがうそを  
 つくのは  
 かな  
 らず

おほ目に  
 みて  
 舌をぬきつこ  
 なしダヨ

えんまありやこそおまへと  
 かうさしむかひであるから  
 まい日わたしがうそを  
 つくのは  
 かな  
 らず

おほ目に  
 みて  
 舌をぬきつこ  
 なしダヨ

弟 閻摩王

瑜伽論五十八葉

為能饒益

諸衆生故

題 地獄花

見は眼あり

かく鼻も有梅の花 乙由



まいとしく彼岸になるとおれを  
大道へもち出してまるでさらし  
者のやうにしゃアがる  
日があたつてのぼせるに  
目口へはすながはいるし  
とんとぢごくの  
せめだ

まいとしく彼岸になるとおれを  
大道へもち出してまるでさらし  
者のやうにしゃアがる  
日があたつてのぼせるに  
目口へはすながはいるし  
とんとぢごくの  
せめだ

弟 閻摩王

瑜伽論五十八 一葉 右

為能饒益

諸衆生故

題 地獄花

見る眼あり

かく鼻も有梅の花 乙由

三番 兄 辻講釋

昔は是を太平記讀。今は号て講釋師。街上にこそを

張扇。日は永くとも短く共。後席は清洲の鎗為合に限

り。其舌は勇士の薙刀に似て。水車の如く廻れども。貧の大

敵は防ぐによしなく。衣服は破て鎧に名ある。大荒目とも申

べく。また霖の籠城には。千刃破より猶難義に見へたり。其楠も

智慧がなければ。南帝の為に頼れもすまじ。此講談師

も不弁なら。大路へ出て産業もすまじ。嗚呼笑止

汝がはかなさ。

三番 兄 辻講釋

昔は是を太平記讀。今は号て講釋師。街上にこそを

張扇。日は永くとも短く共。後席は清洲の鎗為合に限

り。其舌は勇士の薙刀に似て。水車の如く廻れども。貧の大

敵は防ぐによしなく。衣服は破て鎧に名ある。大荒目とも申

べく。また霖の籠城には。千刃破より猶難義に見へたり。其楠も

智慧があらねば。南帝の為に頼れもすまじ。此講談師

も不弁なら。大路へ出て産業もすまじ。嗚呼笑止

汝がはかなさ。

三番第 閻魔王

夫閻王の前小廳場を扣え傍小秤を置あつも至て胸  
斧つづくはひり斧盤を持ち所をまゝ二十五王の同  
廊ゆて二五が五道の冥官へ則家監甲幹より脱衣婆  
との中賈りつ送状の添罪人を引請秤目で科の直段  
と定め是を百余れ下地獄へとをへ血の池で曝衆等活で搗  
碎る時ハ大活して入元のさわりふまる思へ閻魔ハ紙屑屋  
の亭主小等しく罪人の還意紙ハ似たり此世で悪むを  
為者ハ忽罪業の紙を籠へ入恐ても猶慎べし

三番 弟 閻魔王

夫閻王は前に廳場を扣え。傍に秤を置。しかも至て胸  
算つよく。つひに算盤を持ち所をみず。二十五王は同  
廊にて。一五が五道の冥官は。則。家監甲幹なり。脱衣婆  
といふ中賣から。送状の添罪人を引請。秤目で科の直段  
を定め。是を百余の下地獄へわたせば。血の池で曝等活で搗  
碎る時は大活して。又元のとほりにする。思へば閻魔は紙屑屋  
の亭主に等しく。罪人は還魂紙に似たり。此世で悪事を  
為者は。忽罪業の紙くづ籠に入。恐ても猶慎べし。

四番 兄  
備後三郎

川柳点  
高徳は  
筆で

毛むしを  
はらひ  
のけ





于時天保十五年

弟奥道者



奈良七重七堂伽藍やへさくら  
はせを

「三郎の三郎さま  
びんごの三郎さま  
わしはおうしう  
三の戸のものだ  
とばかりにかいてござるのは  
びんごの三郎さま  
わしはおうしう  
三の戸のものだ

弟 奥道者

奈良七重七堂伽藍やへさくら  
はせを

とばかりにかいてござるのは  
びんごの三郎さま  
わしはおうしう  
三の戸のものだ

四番兄 備後三郎

後醍醐天皇は相模入道が。角行みちの如き筋違の

政道を悪みたまひて。隠岐国へ入王将となりしを

備後三郎といふ上手な挿手が。天勾銭と助言を

すれば。名和赤松が待駒を打。楠千刃破の城に

籠りて。化飛車のやうに働き。新田足利の金将

銀将が。いつか味方の駒となり。とうく高時負将

棋となる。斯れば児嶋高德は。太平記中の段將

四番兄 備後三郎

後醍醐天皇は相模入道が。角行みちの如き筋違の

政道を悪きたまひて。隠岐国へ入王将とありしを

備後三郎といふ上手な挿手が。天勾銭と助言を

すれば。名和赤松が待駒を打。楠千又破の城に

籠りて。化飛車のやうに働き。新田足利の金将

銀将が。いつか味方の駒とあり。とうく高時負将

棋となる。斯れば児嶋高德は。太平記中の段將

棋なるべし。

棋なるべし。

四番弟 奥道者

奥乃六條まありとあまの衆詣人波と打有様小  
己が國の陸金と思ひ出し。金御嶽へまうづる日ハ座  
王堂ハ光るを見て。古郷の金華山を暮る月日小居る笑  
そめく霞又出。白川も吉野へあられ葉櫻とる。彼松  
島で曾良が讀たる鶴も身とれといひ。あ時鳥ハ片置山乃  
邊でさ旅くつたひ小椽床して。夜毎小替る本賃宿他  
國の風も身ふるのまハ所謂さち連世ハあひ。ゆん  
ざら悪くもあはぬ事とぞ。

四番弟 奥道者

奥道者六條まありをして。参詣人波を打有様に。

己が國の塩釜を思ひ出し。金御嶽へまうづる日は座

王堂の光るを見て。古郷の金華山を慕ふ。月日に居る閑

もなく。霞に出し白川も。吉野へ来れば葉櫻となり。彼松

島で曾良が讀たる。鶴に身をかれといひし時鳥は。片岡山の

邊でさ。旅からたびに旅寝して。夜毎に替る本賃宿。他

國の風も身にうつれば。所謂みち連世はなさけ。まん

ざら悪くもあらぬ事とぞ。

五番 兄 落雁 らくがん

古今集

躬恒朝臣 みつねあそん

春霞かすみて

いにしかりがねは

今ぞなくなる

秋きりのうへに

五番 兄 落雁 らくがん

古今集

躬恒朝臣 みつねあそん

まはるあつすそと

いあかりのねら

今ぞなくなる

秋きりのうへに



いにしかりのうへに

つれだつて来たからくには

みなふとつがんだ

ノンシ

箒を かすがい

とらうと思やア

がつてあとのやつらが

すてきといそぎやアがるぜ

此ことばをきけば江戸ツ子の

がんもまじりしやうすなり

弟 笠招牌

類柑子

享保四年  
刊行

前 駒形へあがるは旅人おさむらひ蓮之  
附 笠で見まら清十郎千後 只尺



かんとりらをつわあして  
かんがさといふと  
腫物をみて  
ころひ名目  
だひ

弟 笠招牌

類柑子 享保四年  
刊行

前句 駒形へあがるは旅人おさむらひ 蓮之

附句 笠で見まら清十郎千後 只尺

五番 兄 落雁

「雁の居ぬ時は伏勢わかりかね」とは側の川柳点の悪  
くちながら。霏める空の雁を。うす墨に書玉章とは。

神主どのが見立茶番。蘇武が敵地を立茶番も。雁  
の便宜のとゞけばなり。されは兼題の近江八景も。堅田の  
雁に落がるとは。景物が能ゆる成べし。

五番 弟 笠看版

心にかさ着てくらせとは。知足をしへの道歌。清十郎は  
笠に名高く。笠寺いたつて熱田にちかし笠に己が

五番 兄

落

雁

鳳乃居ぬ時の伏勢よりかねと側川の柳点の悪  
ちあぐら。霏める空の雁をうす墨の書玉章とを  
神主どが見立茶番。蘇武が敵地を立茶番も。雁  
の便宜とゞけばなり。されは兼題の近江八景も。堅田の  
鳳乃落がるとは。景物が能ゆる成べし。

五番 弟

笠

看版

心にかさ着てくらせとは。知足をしへの道歌。清十郎は  
笠に名高く。笠寺いたつて熱田にちかし笠に己が



生ほを書て笠森乃観音へ札と納むる坂東順禮揃の  
 笠の早乙女が聲面白き田う歌持を風流の始と  
 りり、あちのくふ笠嶋あま大和國小笠置山あり市女  
 がけへ古風ゆき二蓋がさ六紋所三度あり殿中あり  
 熊谷がさ乃名は猛く小女良手と呼いやはあま花  
 のち月の暈菅の小かぎのいと白き雪の降日の争笠  
 は由は玉縁時雨の狂さ此外ありき笠乃名のけ  
 り都の富士も編がさ名あり

生国を書て。笠森の観音へ。札を納むるは坂東巡禮。揃の  
 笠の早乙女が。聲面白き田う歌。それを風流の始と  
 いひし。みちのくに笠嶋あれば。大和國に笠置山あり。市女  
 がさは古風にして。二蓋がさは紋所。三度あり殿中あり。  
 熊谷がさの名は猛く。小女良手と呼はやさし。春の花  
 かさ月の暈。菅の小がさのいと白き。雪の降日の笠。笠。  
 つゆの玉縁時雨の袖がさ。此外おほき笠の名の。さし  
 かゝりては盡難。斯品々の笠を集て廿余りも積とか  
 いふ。都の富士も編がさに名あり。

六番

兄 挑灯鐘

新撰犬筑波集

かたへ軽くて

持や兼けん

釣がねをちやうちん

賣に言づけて

六番

兄挑灯鐘

新撰犬筑波集

かたへ軽くて

持や兼けん

釣がねをちやうちん

賣に言づけて



コレ／＼たるや

きさまのかついで  
あるたるにみが  
あればぢきに此  
つりが  
がね  
と

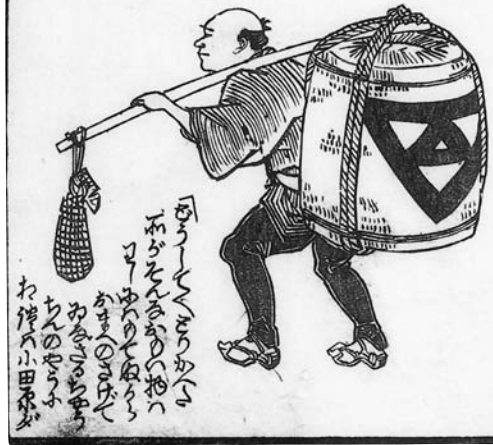
とり  
かへる  
けれ  
ども  
しかし  
おに  
ころしでは  
まつひらダ

弟 空樽買

題五字

ツキヌエン  
不盡縁

カスツケ  
粕漬ノ樽



どうして〜とりかへた  
所がそんなおもい物は  
わしにはもてぬから  
おまへのさげて  
みなさるちやう  
ちんのやうに  
相模は小田原ダ

弟 空樽買

題五字

不盡縁

粕漬ノ樽

六番 兄 挑灯鐘

安珍につりがねは日高川の道成寺に名高く。

てうちんに釣鐘は瀧本の昭乗が筆なり。それは

蛇に化むかし語。是は鬼に持せし當坐の

狂画。狂惱の火は前の挑灯に見え。菩提の鐘

は背の方にあり。

六番 弟 空樽買

あき樽大嘆曰。おのれ程世に憂ものはあらじ。中に  
酒ある時は。庫の内に安座し。呑ほすをキツカケに

六番 兄 挑灯鐘

安珍みはりか糸日高川乃道成寺ふ名高く。

てうちん小釣鐘は瀧本の昭乗が筆あり。持せし

蛇に化むかし語。是は鬼に持せし當坐の

狂画狂惱の火は前の挑灯に見え菩提の鐘

は背の方にあり。

六番 弟 空樽買

あき樽大嘆曰。おのれ程世は憂ものあり。中に

酒ある時は。庫の内小安座し。呑ほすと

物置へ打あまき。樽買の手ふじたると其後忽ふ  
 生皮を剥き物乃哀城あうた様澤庵漬の  
 入物とあ依日を練馬徳丸の在郷よけまよひ  
 又波柿を誂らま多へ須田街四日市中  
 徘徊し籠持主とけごめあき姿城うす鏡  
 離れ底よあくとあまよふ身し思ひ出あ  
 古句あそあき。

尾を邪りとあはれ  
 とは炭あつら

物置へ打こまれ。樽買の手にわたると其後。忽に  
 生皮を剥れ。物の哀をしらす樽。澤庵漬の  
 入物となる日は。練馬徳丸の在郷にさまよひ。  
 又波柿を誂られては。須田街四日市の市中に  
 徘徊し。籠持主とさだめなき。姿をうつす鏡に  
 離れ。底よこよとさまよふ身に。思ひ出し、  
 古句こそあれ。  
 尾ばなとは汝が  
 ことか炭だはら

七番

兄 仁田四郎

川柳点

猪に笹

龍膽の

會符を

たて

七番

兄 仁田四郎

川柳点

猪と笹

龍膽の

會符を

たて



「おれもなにか  
いひたいが  
し、のかける  
ので物が  
いはれぬから  
だんまりで  
ある  
やっサ

おれもなにか  
いひたいが  
し、のかける  
ので物が  
いはれぬから  
だんまりで  
ある  
やっサ



第 船工

船造家

根元切

雉子乃

あゑ



ふねはひあがり  
どんぞこりとは  
あままり

吉田屋の  
喜左な  
ぢぐちか  
しらん

弟 船工  
船造る  
槌のひびきや  
雉子の  
こゑ

ふねはひあがり  
どんぞこりとは  
あままり  
吉田屋の  
喜左な  
ぢぐちか  
しらん

七番 兄 仁田四郎

建久四年皐月のころ。頼朝富士の御狩の時。大き

な猪があらはれ出し。誰いふこともきかざりしを。

仁田四郎が為留たり。扱其野猪は四日市へ賣けん。

又櫛町へ送りけん。行さきは作者もしらず。其ころ

曾我の兄弟が。御寮の狩屋へ切入しを。忠常むか

つて十郎の。足を斬て討留むる。先退治たのは山

鯨。後で殺した栲成は。濡蛸のやうに為。第三度

目は鎌倉二代。頼家の命を蒙。浅間の洞へ入て。神鉢

七番 兄 仁田四郎

建久四年皐月のころ。頼朝富士の御狩の時。大き

な猪があらはれ出し。誰いふこともきかざりしを。

仁田四郎が為留たり。扱其野猪は四日市へ賣けん。

又櫛町へ送りけん。行さきは作者もしらず。其ころ

曾我の兄弟が。御寮の狩屋へ切入し。先退治たのは山

鯨。後で殺した栲成は。濡蛸のやうに為。第三度

目は鎌倉二代。頼家の命を蒙。浅間の洞へ入て。神鉢

月ハ鎌倉二代。頼家の命を蒙。浅間の洞へ入て。神鉢

月ハ鎌倉二代。頼家の命を蒙。浅間の洞へ入て。神鉢

月ハ鎌倉二代。頼家の命を蒙。浅間の洞へ入て。神鉢

の穴ぢの？をあま天下に其名を知らせしり、四郎  
忠常ハ不二の山中の附の能男あり。

七番弟 船工

新田義興公とむろ話の貉ハ舟へ乗てこんどぬ  
あひ小お孫あり一多かる川城のせと昔唄わら  
ひへいづれて寄との縁語る一舳舩工も松右門  
の如く船で妻子ハ養ひあぐ、逆艚の由縁ハ少  
も知らず、ちまごも家業の事あま逆鋸ハつ  
へぬ成金一。

の穴さがしをなし。天下に其名を知られたり。思ば四郎  
忠常は。不二の山には附の能男なり。

七番弟 船工

新田義興公とむかし話の貉は。舟へ乗てとんだめに  
あひ。小おねおろしておなつをのせと。昔唄にうた  
ひしは。こがれて寄との縁語なるべし。此舳工も松右門  
の如く。船で妻子は養ひながら。逆艚の由縁は少し  
も知らず。されども家業の事なれば。逆鋸はつか  
はぬ成金べし。

八番 兄 地藏尊 じざうそん

天明年中百鬼夜行

あやしみを

みする

ちざうは

六道の

能化の

文字を

あらはせしかも 定磨

八番 兄 地藏尊 ちざうそん

天明年中百鬼夜行

あやし

みする

ちざうは

六道の

能化の

文字を

あらはせしかも 定磨



「此作共もいふ馬合とて  
とておれとくものおはけを  
つるにするとはあんまり  
ちざう化にあつた  
中月か

此作者もいかに画ぐみだ  
とておれとくものおはけを  
つるにするとはあんまり  
ちざう化にした  
やつた

弟 蛭 蟻

同集

あふ

時ハ

女良

あて

とらも乃

いとと人を

かけふる哉

真顔



四天王のやつらもごぼんの  
四ツ目ごろしはできもしやうが  
三目のおれと退治やう  
とだめなる  
仕事ダ

四天王のやつらもごぼんの  
四ツ目ごろしはできもしやうが  
三ツ目のおれを退治やう  
とはだめな  
仕事ダ

弟 蛭蟻

同集

ある

時は

女良

とも

なりて

土くもの

いとしと人を かけにける哉 真顔

八番 兄 地藏尊

炮烙地蔵は火宅を示したまひ。鹽嘗ちざうは辛き世

の。衆生をすくはん御哲願なり。拍子木地蔵を番太

郎と見れば。鉄棒に似た錫杖さへ持。錢塚ちざうに

賽銭は積るとも。因果と縛られは氣のない御名。玆

宮地蔵の裏長家には。便宜屋に出る男が住。彼

廓近き箕輪の辺に。背向の地ざうとは。チト客人の

禁句とやまうさん。

八番 弟 螻蛄

八番 兄 地藏尊

炮烙地蔵の火宅を示したまひ。鹽嘗ちざうの辛き世

の。衆生とさくつん御哲願なり。拍子木地蔵を番太

郎と見れば。鉄棒に似た錫杖を所持。錢塚ちざうに

賽銭の積るとも。因果と縛らるゝの幸の流名。玆

宮地蔵の裏長家へ便宜屋へ出る男が住。彼

廓近き箕輪の辺に。背向の地ざうと。チト客人の

禁句とやまうさん。

八番 弟 螻蛄



蜘蛛舞の昔の輕業ゆゑも助の今の興昇なり。それ  
 は蠟蛸の高きとより。是は壁錢の低きを走る世を  
 ありくの得手勝るの蠅虻と伴蜘蛛抑蜘蛛の徳なりや  
 黄帝は是より依船城造吉備公の是が為なり野馬  
 臺を讀衣通姫の歌よ詠は柵機乃夜のトとより  
 ては小女良蜘蛛乃名は優きもより又葛城は年を  
 経て多田の館に妖怪を為るは土蜘蛛の名乃いと  
 惟ろし唯これが禁物とさるは神夏機姫の鋒先と  
 頼光朝臣が太刀かぜなりん。

蜘蛛舞は昔の輕業にして。くも助は今の興昇なり。それ  
 は蠟蛸の高きをわたり。是は壁錢の低きを走る。世は  
 さまぐの得手勝手は。蠅虻と伴蜘蛛。抑蜘蛛の徳たるや。  
 黄帝は是に依船を造。吉備公はこれが為に野馬  
 臺を讀。衣通姫の歌に詠れ。柵機の夜のトとなり  
 ては。小女良蜘蛛の名の優きもよし。又葛城に年を  
 経て。多田の館に妖怪を為し、は。土蜘蛛の名のいと  
 惟ろし。唯これが禁物とするは。神夏機姫の鋒先と。  
 頼光朝臣が太刀かぜになん。

九番 兄 初平仙人 しよへいせんじん

仙人も

天狗も

人も

見たがへて

梢を さへ

ふむな

三よしの、

花 六樹園

九番兄 初平仙人 きゅうばんあに しよへいせんじん

仙人も

天狗も

人も

見たがへて

梢を さへ

ふむな

三よしの、

花 六樹園



ひつじと  
かみくづひろひは  
えんもあらうが  
おれと犬とは  
赤のたにんダ

ひつじと  
かみくづひろひは  
えんもあらうが  
おれと犬とは  
赤のたにんダ

弟 紙屑拾 かみくづひろ  
 題 五字  
 氣ノ毒 キドク  
 センパン  
 千萬  
 店から  
 落た 箆 おちた ざる



犬がほえたが  
 夢に上下は  
 ないイケエレエド  
 こんなしやれはてまへには  
 出まいでるならわんと  
 でもいつてみる

犬がほえたが  
 ほえたがいぬか  
 夢に上下は  
 ないイケエレエド  
 こんなしやれはてまへには  
 出まいでるならわんと  
 でもいつてみる

九番兄 初平仙人

漢の初平が杖をもつて鞭てば。石は忽羊となる。

浅草の老翁手を鳴せば。茶釜は則狸とかはる。石が羊かたぬきが釜か。夫は仙術これは銭じゆつ。とんだり勿たり替つたはなしなり。

九番弟 紙屑拾 笥の皮破て。かみくづひろひ氣障なり。風ひさしのぐみづ、はな。昔は藤屋伊左衛門でも。放蕩がすきれば忽にこんな姿となる事なり。一家親類がみはなす様

九番兄 初平仙人

漢の初平が杖をりて鞭てば石も忽羊となる。浅草の老翁手を鳴せば茶釜は則狸と成る。石が羊かたぬきが釜か。夫は仙術は是ハ銭である。とんだり勿たり替つたはなしなり。

九番弟 紙屑拾 笥の皮破て。かみくづひろひ氣障る形風ひさしのぐみづ、はな。昔は藤屋伊左衛門でも放蕩がすきれば忽ふあんな姿となる事あり。一家親類がみはなす様

九番弟 紙屑拾 笥の皮破て。かみくづひろひ氣障る形風ひさしのぐみづ、はな。昔は藤屋伊左衛門でも放蕩がすきれば忽ふあんな姿となる事あり。一家親類がみはなす様

九番弟 紙屑拾 笥の皮破て。かみくづひろひ氣障る形風ひさしのぐみづ、はな。昔は藤屋伊左衛門でも放蕩がすきれば忽ふあんな姿となる事あり。一家親類がみはなす様

九番弟 紙屑拾 笥の皮破て。かみくづひろひ氣障る形風ひさしのぐみづ、はな。昔は藤屋伊左衛門でも放蕩がすきれば忽ふあんな姿となる事あり。一家親類がみはなす様

九番弟 紙屑拾 笥の皮破て。かみくづひろひ氣障る形風ひさしのぐみづ、はな。昔は藤屋伊左衛門でも放蕩がすきれば忽ふあんな姿となる事あり。一家親類がみはなす様

他人の吉田喜左衛門へ猶さう愛相を盡さず  
 贅と氣根の一盛り七百貫目紙祝儀もむろふ時の  
 役わらたむと牽頭末社よとやけし一紙今更か  
 衣後悔と跡乃祭禮とり前表をむろの衣を  
 のる木綿袴へ龍のまよはけ居たけ日和とよろ  
 んど雨も今日為事なり物とよす花を嵐乃  
 腮をや鉤さん栄花の一睡朝迎ひ覺身の苦ハ生  
 涯不及と人々必慎とそ不忠不孝ハ芥塚へ入犯惱の  
 犬に吼らる事ありし

では。他人の吉田屋喜左衛門は。猶さら愛相を盡すべし。  
 贅と氣根の一ト盛り。七百貫目の紙祝儀もむろふ時の  
 役にはた、ず。牽頭末社にはやされしを。今更おもへ  
 ば後悔は。跡の祭禮といふ前表か。むかしの衣々ひき  
 かへて。木綿袴は籠のまへにさげ。居つけ日和とよろ  
 こんだ。雨ゆゑ今日は為事に出不れず。花は嵐の  
 腮をや鉤さん。栄花の一睡朝迎ひに覺。身の苦は生  
 涯に及す。人々必慎みて。不忠不孝の芥塚へ入。犯惱の  
 犬に吼らるゝ事なかれ。

十番

兄 鬼童丸

ゆくあき

に

似たもの

見せう

牛の尻

十番

兄 鬼童丸

ゆくあき

似てもの

兄の尻

牛の尻



ア、牛が  
かぶつて  
さるけが  
する  
なぞと  
きどう  
丸も  
ふとんを  
ひつ  
かけた  
つもり  
と  
みえ  
たり



弟 旅神樂

浄瑠璃附

あくま先へ

いのさんよ

御厄をらいましヨ

やくわとー



悪魔をらふ  
あまひでまの  
はなもめたり

あゝ外の  
まじりのう  
よのよの  
なれども  
つやア  
だア  
おれを  
ゆまじの  
作芸を  
人のま  
つかやア  
だしに  
めてたし  
おれを  
作者ダ  
人のわる  
けしからぬ

弟 旅神樂  
浄瑠璃附  
し、より先へ  
いつさんに  
御厄はらいましヨ  
やくおとし

けしからぬ  
人のわるひ  
作者ダ  
おれを  
めでたし  
だしに  
つかやア  
がつて  
しかし外の  
事でないから  
よきはよい  
けれども  
○悪魔をはらふ  
し、まひでまつ  
此本もめでたし

十番 兄 鬼童丸

源氏のがき大將頼光さまが。かくれんぼを為て遊びし時。鬼童丸も仲間に入り市原野で牛の皮をかぶり。モウよヲしといひければ。四天王も保昌も。みな頼光にさがし出され。鬼童丸の隠所がしれねば。らいくわうぢれて肝積を發し。みな手傳つて見つけいだし。今度はさどう丸を鬼に為たり。此おに、成し所を見れば。是も大江山の酒顛童子が徒なるべし。

十番 兄 鬼童丸

源氏のがき大將頼光さまが。かくれんぼを為て遊びし時。鬼童丸も仲間に入り市原野で牛の皮をかぶり。モウよヲしといひければ。四天王も保昌も。みな頼光にさがし出され。鬼童丸の隠所がしれねば。らいくわうぢれて肝積を發し。みな手傳つて見つけいだし。今度はさどう丸を鬼に為たり。此おに、成し所を見れば。是も大江山の酒顛童子が徒あるべし。

十番 弟 旅神樂

中村重助が富本の鞍馬獅々に曰。大晦日も元日も  
股引がけの旅神樂云々彼天台の石橋より渡り  
る所へ世業あり天照神をも賣べし自太鼓を  
撃手へ助郷の馬子等しく鉄將水獅々の有  
様を年より丁度あつ十六庄屋が嫁の粧み似  
たり髪あつひぬる身とくさびは日もくれ近病  
との木賃泊の獅々の坐り着損料布團  
の洞入をやせん

十番 弟 旅神樂

中村重助が富本の鞍馬獅々に曰。大晦日も元日も  
股引がけの旅神樂云々彼天台の石橋より渡り  
くるしき世業には。天照神をも賣べし。自太鼓を  
撃は助郷の馬に等しく。鉄醬水獅々の有  
様は。年さへ丁度し、の十六。庄屋が嫁の粧に似  
たり。髪あらひには身もくたびれ。日もくれ近き宿  
はづれ木賃泊の獅々の坐に着。損料布團  
の洞入をやせん。

兄弟きやうだいは左右さいうの手て也なりとは後漢書ごかんじよの語ことば。母弟ぼてい母兄ぼけいを自腹はらからとは。日本にほん

紀きによまれたり。何れ姉あねやら妹いもうとやらは。道成寺みちなりの文句もんくにしられ。似たりにや似たりに

花菖蒲はなあやめ杜若かまつばたは。白石しらしばなし噺ばなしの惣六そうろくがせりふにして。兄公あにきは知れたどののろま殿どのは。

稚もこども知た紋切形しつもんきりかた。弟子おとうとの疖癩おとこ持もちは。曾我そが狂言きやうげんの五郎ごらうが手本てほん。似たにた

ものは夫婦ふうふとは。むかしからいふ諺ことわざにて。にたるを友ともとする事は。呂氏春秋りよしゆんしゆに記しるされたり。

其そのにた事の繪兄弟えいあきやうだいは。他人たにんの京傳きやうでん翁おきな始はじめられて。世よに行おこなはる、事こと久ひさしかりしを。今いま

柳下亭りゆうげの兄公あにき。それが遺のこれるを拾ひろひ。弟いもうとにひとしきおのれに禿筆ちやくひつをかませて。此この

半張はんちやうのうめ草くさとす。呼鳴あゐ文才ぶんさいの妙みぎなる哉や。庄屋しやうやの兄あにき。新田しんでんの舍弟しやていも。

いかで佳興かきやうにいらざるべき。三亭春馬さんていしゆんば記

兄弟あにきは左右さいうの手て也なりとは後漢書ごかんじよの語ことば母弟ぼてい母兄ぼけいを自腹はらからとは日本にほん  
紀きによまれたり何れ姉あねやら妹いもうとやらは道成寺みちなりの文句もんくにしられ似たりにや似たりに  
花菖蒲はなあやめ杜若かまつばたは白石しらしばなし噺ばなしの惣六そうろくがせりふにして兄公あにきは知れたどののろま殿どのは  
稚もこども知た紋切形しつもんきりかた弟子おとうとの疖癩おとこ持もちは曾我そが狂言きやうげんの五郎ごらうが手本てほん似たにた  
ものは夫婦ふうふとはむかしからいふ諺ことわざにてにたるを友ともとする事は呂氏春秋りよしゆんしゆに記しるされたり  
其そのにた事の繪兄弟えいあきやうだいは他人たにんの京傳きやうでん翁おきな始はじめられて世よに行おこなはる事こと久ひさしかりしを今いま  
柳下亭りゆうげの兄公あにきそれが遺のこれるを拾ひろひ弟いもうとにひとしきおのれに禿筆ちやくひつをかませて此この  
半張はんちやうのうめ草くさとす呼鳴あゐ文才ぶんさいの妙みぎなる哉や庄屋しやうやの兄あにき新田しんでんの舍弟しやていも  
いかで佳興かきやうにいらざるべき三亭春馬さんていしゆんば記

三亭春馬記

作者

柳下亭種員



画工

一勇齋國芳



滑稽繪姿合初篇 出版

二篇近刻

浅草雷神門内

版元 耕書堂 葛屋重三郎

作者 柳下亭種員

画工 一勇齋國芳

滑稽繪姿合初篇 出版

二篇近刻

浅草雷神門内

版元 耕書堂 葛屋重三郎

(しろと まきこ) 科学技術・経済課非常勤職員)